

## 2019年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	<b>保育環境の「静けさ」と幼児の協同的音楽活動の相関</b>
キーワード	①幼児教育、②音環境、③音楽活動

### 研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏名	フジオ カノコ 藤尾 かの子	所属等	エリザベト音楽大学 楽学部 楽文化学科 幼児音楽教育専修 講師
プロフィール	エリザベト音楽大学大学院音楽研究科修士課程修了。広島大学大学院教育学研究科博士課程後期修了。博士（教育学）。平成27年より現職。 学部時代に学んだイタリア発の幼児教育のメソッドである「モンテッソーリ教育法」に興味を持ったことを起点に、修士・博士課程では、モンテッソーリ教育法における音楽教育について研究してきました。モンテッソーリ教育の幼稚園では、自然につくり出された静かな環境の中で、子どもが楽しそうに、かつ集中した様子で活動する姿が見られます。このようなモンテッソーリ教育の保育環境の特徴から本研究の着想を得ました。今後、日本の保育の質を向上していくために、音環境の視点から研究を進めていきたいと考えています。		

### 1. 研究の概要

本研究は保育環境におけるある特定の「静けさ」と幼児の協同的な音楽活動の相関関係を説明することを目的とした。対象園は、保育において自然な「静けさ」が生起するモンテッソーリ教育を実施している幼稚園と公立幼稚園の2つの園である。なお、いずれの園においても人的対象は社会性の発達が著しい年中児とした。調査期間は2019年4月～2020年3月の1年間とし、1ヶ月に1回程度の調査を基本とした。研究方法としては、保育環境の「静けさ」と幼児の音楽性を質・量の両側面から明らかにするためにミックスドメソッドアプローチを用いた。「静けさ」の質的調査では、両園の対象クラスの保育者の「静けさ」に対する率直な意識を調査するために、半構造化インタビューを行った。それに加え、幼児の保育活動や音楽活動の様子を観察またはビデオ撮影し、行動の分析を行った。一方、両園の保育室における「静けさ」の量的調査は、「保育者の音環境に対する配慮及び幼児の活動の様子」と「騒音レベル」との関係性を明らかにすることを目的として、園児が登園してから降園するまでの間、普通騒音計を用いて保育室の騒音測定を行なった。結果として、モンテッソーリ園の音環境は、これまでに蓄積された日本における幼稚園の室内音量のデータと比較して、平均よりも静かであった。モンテッソーリ園における「静けさ」の性質とは、モンテッソーリ教育の理念に基づいて生起したものであり、保育者や幼児の集中力や精神力からもたらされるものだと考えられる。さらに、「静けさ」が生起する環境において、幼児は自らの声や音を意識的に聴くことのみならず、他児と互いに聴き合いながら音楽活動に取り組んでいることが明らかとなった。

### 2. 研究の動機、目的

保育環境と幼児の音楽性についての研究は現在蓄積されつつあるが、いまだ一考の余地がある分野である。また、保育園・幼稚園の音環境と幼児の音楽性に着目した研究自体が少なく、保育環境の「静けさ」と個々の幼児の「音感受」の相関について考察した研究にいたっては吉永（2012）に限定される。幼児が音を感受・表出したり、また協同的に音楽をするための基本は「静けさ」であるにも関わらず、依然として、幼児が大きな声で歌う姿や話す姿こそ幼児らしい、という幼児観を持つ保育者は少なくない。さらには、保育環境の「静けさ」が幼児にとって不自然と感じるという保育者の声を聞くこともある。

申請者によるこれまでの調査から、幼児の協同的音楽活動には、ある特定の「静けさ」が必要でありそうなことが明らかになった。これは、広島県内 9 つのモンテッソーリ教育実施園の保育者 (61 名) を対象として行った質問紙調査であり、①幼稚園の音環境が幼児の協同的音楽活動の中で「音を聴く」ことを促していること、さらに、②「音を聴く」ということが音楽活動それ自体の質に影響を与えること、という 2 点が明らかになった。そして、その背景には、モンテッソーリ園の保育者は音楽活動において、幼児同士、あるいは保育者と幼児の間で「静けさ」をつくり、それを共有することを意識的に行っているということ、また、保育者は幼児が音を自発的に聴く姿を尊重しているという教育的な配慮があった。さらに、「静けさ」というものを捉えるようになった幼児は、歌唱や器楽合奏など協同的音楽活動を実施する上で、人の声や楽音に自分の音を重ねようとする、アンサンブル力が養われているという結果も得られた。

このように、幼児の協同的音楽活動が成立するための重要な要素として、「静けさ」があるということが浮き彫りとなった。つまり、ここには、特定の「静けさ」という環境が、幼児の協同的音楽活動を自然と生み出す、という仮説が成り立つ。しかし、保育環境における「静けさ」の具体的性質はこれまで明確になっていない。この点について調査することで、保育現場への「静けさ」の導入のきっかけとなる理論的基盤を構築することが可能になると考えた。

以上を前提として、本研究では、①保育現場への「静けさ」の導入のための理論的基盤の構築、及び、②ある特定の「静けさ」が幼児の協同的音楽活動を自然と生成するという仮説の立証、という 2 点を目的とした。

### 3. 研究の結果

#### ①保育者へのインタビュー

モンテッソーリ園及び公立幼稚園ともに、申請者が保育者 1 人につき約 30 分の半構造化インタビューを実施した。インタビューの大項目は、①保育者歴、②保育者の教育観、③幼児への音楽指導観、④保育における音環境に対する意識とした。ここでは④保育における音環境に対する意識を取り上げる。なお、インタビューは KJ 法を参考にしながら分析を行なった。

まず、モンテッソーリ園における保育者らへのインタビューの概要は以下のとおりである。

- ・ 日時：2019 年 8 月 1 日 (木) 17 時～
- ・ 対象：クラス担任 (モンテッソーリ園での勤務は 6 年目) 及び音楽担当の教諭 (モンテッソーリ園での勤務は 24 年目) (両者ともモンテッソーリ教諭免許の有資格者)

分析の結果、「日常の保育における静けさの価値」、「音楽することにおける静けさの価値」、「音環境に対する配慮」という 3 つのカテゴリーに分けられた。「日常の保育における静けさの価値」には、静けさがコミュニケーションをとるための基盤になることや、幼児が深く集中するために必要であること等が含まれる。「音楽することにおける静けさの価値」には、幼児が精神を落ち着かせることや、演奏において幼児が他児の奏でる音を集中して聴くこと等が含まれる。「音環境に対する配慮」は、保育者が自らの行動に目を向けた内容である。具体的には、保育者が適切な音量で話をすることや、不要な音が出ないようにして動くということである。

次に、公立幼稚園の保育者へのインタビューの概要は以下のとおりである。

- ・ 日時：2019 年 5 月 28 日 (火) 14 時～
- ・ 対象：クラス担任 (公立幼稚園での勤務は約 30 年目)

分析の結果、「個々の子どもに対する聞こえへの配慮」、「気持ちを落ち着かせるための静けさ」、「音楽をする上での基盤となる静けさ」という 3 つのカテゴリーに分けられた。この公立幼稚園は特別支援教育の拠点園として指定されていることから、個々の幼児のニーズに対応した支援に力を注いでいる。そのため「個々の幼児に対する聞こえへの配慮」には、聞こえに対して配慮を必要とする幼児に対して、保育者は静けさを基盤として語りかけることや、幼児がよりよく聞くことができるように静かな環境をつくることを心掛けていることが含まれていた。「気持ちを落ち着かせるための静けさ」には、幼児が活発な動きを行なった後、静けさがクールダウンの要素となることや、静けさそのものに心地よさを感じて欲しいという保育者の願いが込められていた。「音楽をする上での基盤となる静けさ」には、幼児が音を聴いてそれに合わせて表現することや、落ち着いた気持ちで音楽をするということが含まれていた。

#### ②音楽活動の様子

ここでは、ある1日のモンテッソーリ園と公立幼稚園における音楽活動を取り上げる。これらの概要は以下のとおりである。

<p><b>*モンテッソーリ園</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 観察日：2019年5月30日（木）</li> <li>・ 実践者：音楽担当の教諭</li> <li>・ 対象児：年中児11名（男児：6名、女児：5名）</li> <li>・ 場所：ホール</li> <li>・ 音楽活動の流れ               <ol style="list-style-type: none"> <li>①拍打ち（3拍子）・・・約1分</li> <li>②リズム運動・・・約6分</li> <li>③静粛のレッスン・・・約3分30秒</li> <li>④ウッドブロック・・・約10分30秒</li> </ol> </li> </ul>	<p><b>*公立幼稚園</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 観察日：2019年5月28日（火）</li> <li>・ 実践者：クラス担任</li> <li>・ 対象児：年中児15名（男児：9名、女児：6名）</li> <li>・ 場所：保育室内</li> <li>・ 音楽活動の流れ（全て歌唱）               <ol style="list-style-type: none"> <li>①みんなの広場・・・約1分30秒</li> <li>②せんせいとおともだち・・・約1分</li> <li>③ぶんぶんぶん・・・約20秒</li> <li>④ありさんのおはなし・・・約1分</li> </ol> </li> </ul>
--	---

初めにモンテッソーリ園の音楽活動について述べる。音楽担当の教諭の基本的な指導スタイルは、初めに手本を示し、その後、幼児がそれを模倣するというものであった。特筆すべきは、教諭の指導言が非常に少ないという点である。ウッドブロックの活動において、教諭は、楽器の基本的な奏法を言葉で説明するのではなく、響きの良い音が出るように体の使い方を分析して示していた。ここでは、日常の保育の中で保育者が幼児にモンテッソーリ教具の使い方を伝える際に用いる「提示」の理論が応用されており、指導上の工夫だと言える。また、静粛のレッスンと呼ばれる活動では、教諭と幼児とで静かな環境をつくり、耳を澄ませて音を聴くという姿が見られた。音楽活動全体を通して、幼児は安定した様子で音楽に取り組んでいたが、とりわけこの静粛のレッスンにおいては、幼児が自分の体を動かすことで出る微かな音にも注意を向けながら、音に対して興味・関心を抱いている様子が窺えた。

公立幼稚園の音楽活動は歌唱が中心であった。全ての歌唱活動において、保育者は電子ピアノで伴奏しながら幼児と共に歌っていた。その際、保育者が幼児の姿を確認しながら伴奏することができるよう、電子ピアノを幼児らと対面するように配置するという工夫が見られた。特別な配慮を要する幼児らの中には、活動への参加が困難な者もいたが、大多数の幼児は歌唱活動に参加していた。しかしながら、幼児の歌声に着目すると、記憶していない一部の歌詞において音量が小さくなる一方、歌うことのできる歌詞では喉を酷使するような歌い方をしていた。このような幼児の歌い方に対する保育者の指導言はなく、「すてきな歌声」であると声がけをしていた。保育者は音楽活動を通して幼児の音楽的な発達を促すというよりも、幼児のありのままの姿を受け止め、認めることを重要視するという姿勢であった。

### ③保育室の騒音測定

本研究で使用した騒音計は、普通騒音計TYPE6236（アコー社）である。騒音計はマイクだけが出るようにして空き箱に入れ、部屋の隅の棚の上に置くことで、幼児の注意が向かないように工夫した。なお、保育室における1分ごとの等価騒音（騒音のエネルギーの平均値）を測定した。ここでは上述の音楽活動と同日の測定データを取り扱う。

表1 モンテッソーリ園における室内音量（2019年5月30日（木））

時間	活動内容	室内音量（平均値）
9:30-11:00	順次登園・モンテッソーリの自己活動 （対象クラスの幼児の数：31名）	50-80dB （自己活動：55-69dB）
11:00-11:30	音楽（年中児のみで実施：11名）	50-80dB
11:30-12:45	お弁当準備・お弁当・片付け	60-75dB
12:45-13:30	外遊び・保育室での遊び	60-80dB

13:30-14:00	帰りの会・順次降園	50-65dB
-------------	-----------	---------

表2 公立幼稚園における室内音量（2019年5月28日（火））

時間	活動内容	室内音量（平均値）
9:00 まで	順次登園・室内遊び（年中児：15名）	68-79dB
9:10-9:15	歌唱活動	77-86dB
9:15-9:45	集まり・歌唱活動・お遊戯・絵本の読み聞かせ・触れ合い遊び	71-86dB
9:45-10:25	室内での自由遊び	72-84dB
10:25-10:55	参観日の練習（途中から室外へ移動）	51-79dB
10:55-11:30	制作活動	55-88dB
11:30-12:30	お弁当準備・お弁当・片付け	62-84 dB

上記2つの園の室内音量を比較すると、1日を通してモンテッソーリ園の数値が低い結果となった。さらに、保育室における幼児の人数について、モンテッソーリ園は音楽活動を除いて31名であるのに対し、公立幼稚園は15名である点にも着目する必要がある。これは、公立幼稚園と比較して、モンテッソーリ園の保育者と幼児は、1日を通して会話をする際の声のボリュームが小さく、また、落ち着いた様子で生活していることが関係していると思われる。

#### 4. 研究者としてのこれからの展望

本研究を通して、調査対象のモンテッソーリ園においては、モンテッソーリ教育の理念に基づく環境設定や保育が「静けさ」を生成し、子どもの音楽的発達に影響を与えているという仮説が成り立つことが明らかとなった。しかしながら、保育における音環境についての先行研究では、主として量的な研究手法から論じられてきているため、音環境における質保証のためのエビデンスの蓄積は今後も重要な課題だと言える。

以上から、今後の展望としては、モンテッソーリ園での騒音測定と音楽活動の実態についてのさらなる調査を通して、音環境と幼児の音楽的発達の相関を質・量の両側面から捉える。加えて、モンテッソーリ園の保育者の音環境に対する意識を明らかにするために、全国のモンテッソーリ園を対象とした質問紙調査を実施する。それらを通して、日本の保育の音環境における理想的な評価スケールの作成に貢献することを目指したい。

#### 5. 社会に対するメッセージ

この度のご支援を受けることで、モンテッソーリ教育の幼稚園では、モンテッソーリの教育思想のもとで自然な「静けさ」が生成され、幼児が音を注意深く聴きながら音楽的な成長を遂げているということ、客観的なデータのもとで解明することができました。

現在の日本の幼児教育では、幼児が生活の中で出会う環境との相互作用を通して体験を深め、成長・発達していくことが強調されています。その環境のひとつとしての音環境は、幼児がコミュニケーションをとることや、自らの活動に集中して取り組むこと、また、音や声を聴きながら行う音楽活動を実施する上で重要な役割を果たしています。幼児が保育所や幼稚園で快適に生活し、健やかに成長することができるよう、今後も保育における音環境の視点から研究を継続していきたいと考えております。

本研究の遂行にご支援を頂きました、日本私立学校振興・共済事業団とその関係者の皆様に深く感謝申し上げます。